「 とよなか地域ささえ愛ポイント事業の目的と意義 」

大阪教育大学教育学部　新崎国広（社会福祉士）

（1） これからの社会福祉・地域福祉の考え方＝「公助」＋「共助」＋「広義の自助」

狭義の自助：自分のことは自分でする、自分のことや家族の問題は，自己責任で解決するという考え方
広義の自助：お互い様、当事者や住民同士がお互いに協力し、支え合って自分たちの暮らしを豊かにする
共助：ｳｴﾙﾋﾞｰﾝｸﾞ(wellbeing)：公助だけでは対応できない生活課題に対し，皆で協力して解決する
公助：ウエルフェア(welfare)存権保障。行政・自治体が責任をもってセーフティネットを構築する

A.公助	B.共助
法的根拠：憲法第２５条「生存権」保障	法的根拠：憲法第１３条「幸福追求権」
対象限定型社会福祉(social welfare)	協働参画型社会福祉(social well-being)
サービス提供者主体（救済・指導・処遇・援助）	利用者主体（自己決定の尊重・側面的援助・支援）
分野別対象別（障がい者・高齢者・児童等）	地域福祉の推進
公的サービス中心（公正・平等）	マルチミックス（ﾌｫｰﾏﾙ&ｲﾝﾌｫｰﾏﾙｻｰﾋﾞｽの連携）

（2） 共助（ボランティア活動・地域福祉活動）に期待される4つの役割

①自立への援助者・支援者の役割
②社会関係のファシリテーター（橋渡し）の役割
③代弁者(ソーシャルアクション)としての役割
④ボランティア自身の生きがいづくり・自己実現(Helping you,helps me)の役割
　⇒活動を通じてボランティア自身が豊かな社会性を持った成熟した人間になる
　⇒利用者とボランティアの双方の自己実現に寄与する

（3） 施設におけるボランティア活動の役割とメリット

施設におけるボランティア活動の意義を考える際に、**【利用者にとっての意義】【社会福祉施設にとっての意義】【地域にとっての意義】【ボランティアにとっての意義】**の4つの視点から考えられる。

【利用者にとっての意義】
〇利用者へのQOL(Quality Of Life)を向上させる意義
〇利用者の地域社会関係が豊かになる意義

QOLとは、「生活の質」と訳されることが多い。しかし、Life の意味をもう少し深く考察する必要がある。広辞苑（岩波新書）によるとLifeとは、①命、生命②生活、暮らし③生涯、人生、一生の3つの意味を持つ。
社会福祉施設でのボランティア活動では、職員とボランティアの役割の明確化が必要となる。基本的に利用者の「命、生命」に深く関わる食事・更衣・排泄介助等の利用者の人権に深く関わるサービスは専門職員が責任をもって行う必要がある。ボランティアが職員の代替として安易に介護等直接サービスを行うことは危険性を伴うことが多いからである。
次に，利用者の直接的な生活支援（介助）に関する分野も、ボランティアが行うより職員が対応する方が望ましい。しかし、現状を考えると職員のみでは利用者一人ひとりの多様な個別的ニーズのすべて対応することは難しい。人的な配置の面だけで見ても個別的対応が可能なだけの職員配置基準になっていないからである。そこで利用者の多様な個別ニーズへの対応の一部をボランティアが担うことで利用者のQOLの向上を図っている施設がある。その施設では、ボランティアが希望し、介護研修を受ければ介護補助活動も行うことができる。その施設ではユニットケアを取り入れており、ボランティアが介護を行うことに伴うリスクに対して、ユニット毎に複数のコーディネーターを配置し、きめ細かいコーディネーションを行うことで対応している。しかし，一般的には利用者の趣味に関する支援や利用者に対する話し相手や遊び相手など利用者の「人生（生きがい）」に関する部分が、ボランティアが最も力を発揮できる分野である。いずれの場合も、利用者のQOLの向上を目的としてボランティア受入れを行うためには、施設のボランティアに関する基本方針を明確にすることが必要である。

【社会福祉施設にとっての意義】

○地域住民から選ばれる施設として認知されるために

2000 年から本格的に始動した社会福祉基礎構造改革では、介護保険や支援費制度といった利用契約制度への移行が本格化した。実態的にはまだ課題は多いが、法律上は利用者から選択される存在となった。

今後選ばれる施設になるためには、基本理念やサービス内容を地域社会に広く啓発していくことが必要となった。ボランティアは活動を通して、利用者の生活実態を知ることができるし、職員の利用者に対するサービス内容も身近でみることができる。今後は質の高いサービスを提供することが結果的に地域住民から選ばれるための条件になる。このように「地域社会と施設の共存関係」をどのように構築するかが今後さらに重要となる。

○利用者に対する「正しい理解を深める」役割

ノーマライゼーション理念やバリアフリーの考え方が少しずつ浸透していく兆しはあるものの、認知症高齢者や知的障がい者や精神障がい者等自分の意志を明確に伝えることが難しい方々に対する社会の理解は十分ではない。地域住民は直接的な交流を通してはじめて利用者を身近な存在として受入れる。これにより利用者が社会参加する際の心理的障壁などが軽減され、社会連帯感形成の第一歩となる。このように長期的展望に立つと、施設の基本理念の実現にも寄与するといえる。

【地域にとっての意義】

○「施設の社会化・施設の地域化」を促進させる意義＝「開かれた施設」＝地域福祉の拠点の役割

従来の「利用者・家族－職員」の二者関係で完結する閉鎖的環境では、利用者のQOLの向上や社会性の発達を促すことは困難である。「施設の社会化」により施設と地域社会の深い相互理解と社会連帯感が芽生える。その結果、利用者の社会性およびQOLの向上を促すことが可能となる。このように考えると、「施設の社会化」を促進させる施設ボランティアコーディネーションのもつ意義も大きいことがわかる。

○地域住民に対する専門的機能の還元(施設の社会貢献の一環)

施設を地域の社会資源として積極的に活用していくことは、地域住民にとってもメリットは大きい。このためには、その施設の役割や機能を地域住民に啓発していくことが不可欠である。地域住民が地域内の施設で活動することを通してより深くその施設の専門的機能を理解することが可能となる。また、社会福祉施設の社会貢献事業の一つとして、地域の福祉意識の向上にも貢献できる。

【ボランティアにとっての意義】

○社会的活動への参加による健康促進＆介護予防

ボランティア活動を通して、体験学習的にコミュニケーションの重要性や人間関係のとり方を学び、ボランティア自身が個々の社会的状況での社会的機能（コミュニケーション能力）の向上を促す体験学習としての意義がある。

○ボランティアの自己有用感の獲得と自己実現

ボランティアは施設で利用者やボランティアコーディネーターから感謝され、信頼されることを経験することで社会的有用感を感じる。活動を通して「所属と愛情欲求」と「自尊欲求」を充足する。このような肯定的な体験を繰り返すことにより自信が生まれる。これによって日常生活の中でも主体的に行動することが可能となる。このようにボランティアコーディネーターがボランティアに対しサポーティブに関わることで、ボランティアが自己肯定的感情を感じられるようにサポートすることも施設ボランティアコーディネーションの役割である。利用者とボランティアが相互交流を通して相手を理解し合い、双方の主体性を尊重し合う関係を育てる。施設ボランティアコーディネーションには、このような双方の自尊感情を高め、信頼関係の形成を促す役割が求められる。

○ボランティア学習からの視点「学びの場としての施設」《多様な価値観との出会い》

ボランティア活動を行うことで今までの自分の生活環境とは異なる他者との出会いを体験する。そして多様な価値観の存在を理解する。出会いの中で自分自身の生き方も再認識することができる。ボランティアは活動を通してコミュニケーションの重要性や人間関係のとり方を学ぶ。このように、ボランティア自身にとっても、主体性やコミュニケーション能力の向上を促すトレーニングとしての意義もある。障害の有無や年齢の違いを越えた日常では体験できにくい様々な生活や多様な考え方に出会うことによって、自分自身の生き方を再認識し、自分自身の社会的機能の活性化（主体的に人と出会っていける能力）を促す役割も期待できる。

○身近に信頼できる職員（ボランティアコーディネーター、ボランティア担当職員）が存在する点